（定價二錢）　　　　（遞信省認可）

壹年三百六十五日毎日刊行の新聞紙は日本國中に唯時事新報あるのみ

時事新報

第千七百九十六號
明治廿年十一月廿八日　月曜日
舊丁亥十月十四日（丁、酉）
日出午前六時四十九分　日入午後四時四十六分
月出午後三時四十分　月入午前四時零八分
滿潮午前四時零八分　午後四時二十九分
（西暦一千八百八十七年）

時事新報定價

時事新報ハ一年三百六十五日一日モ休刊セズ其代價郵送料廣告料ハ左ノ如シ

一枚三錢○一箇月前金五十錢○三箇月前金一圓五十錢○六箇月前金三圓
一箇年前金六圓
○時事新報社ヨリ直接ニ郵便ニテ發送スルモノニ限リ本文定價ノ外ニ一箇月二十六錢ノ郵送料ヲ申受ク

時事新報廣告料前金一行ニ付

一行廿四字詰	一日限	二日以上六日迄	七日以上十五日迄	十六日以上
自一行至十行	十錢	八錢	七錢二厘	六錢八厘
自十一行至卅行	九錢	七錢	六錢三厘	五錢九厘五毛
三十一行以上	八錢	六錢五厘	五錢八厘五毛	五錢五厘

時事新報

日本鐵道會社の工事

日本鐵道會社の第三區線路中、郡山以北仙臺までの軌條敷設は既に一箇月以前に工事を竣はりて東京仙臺間の連絡始て爰に通じ昨今汽關車の往復を開き尚は線路中地盤を固めつゝあれ、際中なれば遲くも來十二月の十日前後には東京仙臺間鐵道の開業ある可しと云へり斯て日本鐵道會社に於て現今全く其工事を畢りたるの線路は第一區品川前橋及上野赤羽間の鐵道延長八十哩第二區大宮白河間同く八十哩之に今回落成したる白河仙臺間凡そ一百哩を合計すれば其總延長二百六十哩にして同會社創業以來今日迄の成功事業即ち是なり回顧そるに鐵道會社が我政府より特許を得て社の組織に着手したるは今を距ると出入七年明治十四年十一月の事にして當時政府の命令書中にも見ゆる如く同會社は其線路を東京より高崎を經て前橋に取り他の一線は中途より轉じて白河仙臺盛岡を經過し青森に至る迄の鐵道を建築し其間に運輸業を營むことを特許せられたる者にして會社株金募集の上は拂込の翌月より起算し毎區建築の落成までは一箇年八朱の利子を下附し毎區運輸業開始の後も其收入純益年八朱に上らざる時は東京より仙臺までの間は毎區十箇年間仙臺より青森までは同十五箇年間、日本政府の國庫より其利足を補給せらるゝの權利ある者にして待遇實に優渥なりと申す可し左る代りには鐵道會社は之に酬ゆるの義務として東京青森間の全線路を本書下附の當月即ち明治十四年の十一月より起算し滿七箇年間即ち來廿一年の十月までに竣成せしむるの都合なれは如何にも至當の責任なりとして世人も亦會社が右の期限內に必ず其工事を全うす可きと信じ、爾來荏苒今日に至りて見れば漸よく仙臺までの鐵道も落成して不日開業の式ありと云ふの次第なれば我輩も一たびは之を聞て喜悅の思ひありたれども偖顧て既往の歳月を屈指したるに烏兎早々既に去て滿六年、殘る一箇年の其間に我々も汽笛一聲客車に投じて瞬時に東京青森間を往來するの便利を得可きやと熟々工事進歩の實狀を考へ見るに東京仙臺間の落成鐵道は其距離凡そ二百哩、短きに非ざれとも仙臺以北盛岡を經て青森にまで至るは距離又更に二百餘哩、彼此合して四百餘哩の鐵道なれども今日漸く落成したるは僅か共半數なるに會社特約の期限は既に七分の六を經由して而今幸らくも一箇年の歳月を餘すに過ぎず既往六箇年の其間に漸く二百餘哩の工事を進めたるの手際にして殘餘の一箇年に能く他の二百餘哩の鐵道を敷設そるを得るや否やの問題に至りては我輩も其答辯に苦む者なり

政府より保護待遇は優渥なる代りには鐵道會社も政府に對する義務責任の履行を嚴にせざる可きは理の當然なる者にして若しも保護のみを私して其責任を全うせざる場合もあらば政府は其特約を如何にして可なるやは早晩我政府と日本鐵道會社との間に起る所の疑問なるべし政府が會社の爲めに年八朱の利益を保證したるの事實に就ても既に論者中には其說あると免れず曰く會社收入の純益一箇年八朱に上らざる時東京より仙臺までの間は毎區十箇年間仙臺より青森までは毎區十五箇年間政府より其不足を補給すべしとある十箇年十五箇年の其期限は毎區運輸業開始以後は年數あるや但しは又特許條約下附の當年より起算する者なるや例へば白河仙臺間第三區線路工事は如きも會社創業以來既に滿六箇年を經過して特約期限早や盡るに垂んとするの今日に漸く運輸業を開きたりとして八朱補給の約束は今より後ち滿十箇年の事なるや或は又去る明治十四年より起算して補給の期限今後僅に四箇年を餘さざる者なるや漠然たる特許條約の其中には此等の明文も見えざれども假に爰に說を作りて十箇年十五箇年の年限は孰れも會社發狀下附の當日より起算す可き者なり其間會社の工事進まざるより隨て補給年限の減縮す可きは自然の結果にして若し多く保護の澤に浴せんとならば一日も早く工事を捗取らせて營業開始の年月を延ばすに若かざるに會社の計始めより爰に出でざりしは謂ゆる自得の業にして政府は更に其餘の年月まで會社の爲めに國庫の金を投ずるの責任なき者なりと云はゞ全く夫れ迄の話にして我輩別に掛念する所もあけれども之に反して補給の年月は毎區營業開始の當日より起算する者にして工事の進むも進まざるも其遲速の事は利子の補給に關係を有せずと云ふの論に至りては甚だ理不盡の次第にして其趣は會社、無責任の保護に浴し恰も官恩の甘きに狃るゝ者に非ざるあきや云々と以上論者の所說、激なる所あきに非ずと雖も其論意鐵道會社に早く其工事を進ましむるを望むに在る者なりとそれは我輩も此點に於ては之を贊成せざるを得ず特に萬々有るまじき事とは思へども鐵道會社が特約七箇年の年月を經過したるに拘はらず唯漫に依然として論者の謂ゆる無責任保護の官恩に浴せんとする如きの次第もあらば他日其場合に際して我輩も鄙見を陳するの機會あらんと雖も今日に於ては將來尚は一箇年の歳月なきにも非ざれば仙臺以北青森まで出來る丈に工事を進ませ會社に於て氣根限り其特約の義務を果すを竢て後右の問題を講ずるも未だ遲からず今は暫らく論者を諭め只管會社に向て其工事進歩の急あらんことを祈る者誠に我輩の精神なり

雜報

○巴里北京間の鐵道　支那の一新聞の記載する所に據れば佛國政府は支那政府と巴里より支那トルキスタンを通過し夫より雲南四川地方を廻りて直に北京に達する鐵道線路を敷設する議を整へたるが此大工事は少なくも十年間を費やすべき見込なりと見えたるがその果して如何

○九州鐵道　九州鐵道線路百八十二哩間の實測調は來る廿一年二月頃の豫定なりしが同會社にては本發狀の下附を非常に取急ぐに付本年中に至急實測を了らんとて豫て出京中なりし山田監督技師は此程福岡の本社へ赴きたりと又大分及鹿兒嶋地方の有志者相議り九州鐵道の線路を同地方へも延長せんとを申出したる由にて同會社は多分右兩縣下へも延長するならんといふ

○鐵道敷設の請願　過般安井理民氏が千葉縣下へ鐵道を敷設せんとて之を他の諸有志に謀り既に去る十六日には向嶋の八百松樓に發企人總代の總會を開き創立委員と撰定し不日請願書を其筋へ差出す迄の運に至り居る事なるに茲に又別に鐵道敷設者の一派こそ現はれ出でられ發企者は即ち白石義郎氏外十二名にして其內の二三氏は此程千葉縣廳に出頭して知事に面會し鐵道敷設の請願書を差出せしに知事は之を受理せし旨を述べられたるよし其線路は東京本所より市川船橋を經て千葉に達し夫より更に佐倉成田を經て佐原に至る見込なりと云ふ扨同樣の工事を斯くも二派に分れて請願するも其筋に於て雙方の請願を同時に許可せん事は實際なられ得べき話しにもあらざれば兩派互に小異を捨て一致連合して其目的を達せん事を計るこそ上策なれと中には憂慮し居る人もありとの

○岩嶋匡徴氏　慶應義塾の社中岩嶋匡徴氏は今度群馬縣尋常中學校長と擔任すべき筈にて來る三十日出發するといふ

○工手學校　豫て本紙上にも其計畫の由を記しゝる工手學校は今度愈々設立することとなりたり同校の目的は近時我國の工業漸く隆盛に赴くに從ひ其技術者を要そること亦た頗る多きに至りたるに今日の有樣にては一二の官立學校ありて高尚なる技師は續々此門より輩出すれども未だ其各科技師の補助たるべき工手と養成する學校なきより今の補助工手ゝる者は大抵學術應用の思想に乏しく爲に技師は其使役に不便を感するのみならず自然工業の進歩に障礙を與ふること少なからざれば此際工手學校を設立して學科を土木、機械、電工、造家、造船、採鑛、冶金製造化學の八科に分ち世の有志の子弟及び晝間各工場に傭雇せらるゝ職工徒弟の爲めに就學の道を啓くにありといふ左れば其授業の方法も專ら速成を旨とし毎科一年半と以て卒業せしむるものにて授業時間は日沒後凡そ四時間に定めにして右創立に關はる事務は京橋區三十間堀三丁目六番地の工學會に於て取扱ふよし又同校は校友より成立つものにして校友中より管理委員若干名を選擧し管理委員は互選により校長一名幹事四名と置くの仕組なりとぞ尤も校友とは學術に關係あり兼て同校は創立に功勞ありたる者を云ひ又ろの後と雖も同種の人は校長より之を推選する法にして今度の役員及び管理委員は左の如しといふ

校長　中村貞吉
幹事　藤谷立太郎
同　中野初子
同　伊藤留六郎
同　志田林三郎
同　岡本春吉
特選管理長　渡邊洪基
管理委員　長野金吾
同　三好晉六郎
同　古市公威
同　松本莊一郎
同　白石直治
同　杉村次郎
（役員は略之）

○上海通信　十一月
鹽田全權公使　北京
試補には去る十六日
到着の處猶は前途を
指し北京に赴きたり
黎欽差大臣　前信に
大臣黎庶昌氏は去る
く各國領事及び紳商
しとり
胡鐵梅氏　曾て當方
と風流社會の人ゝる
日本より井龜の職工
えゝるよし聞及しが
方にて井泉の名目あ
まゝれあるも概ね水
僅か二三丈に止まる
と欲するも絕て得る
衛生と顧みざる姿あ
義に政府に上申せし
と以て日本に赴きゝ
上り先づ直隷省の重
みる積りなりと云へ
故岡正康氏　氏は明
の貿易に熱心從事し
て蘇州の婦人某を娶
に料らず當春二月中
ば婦人の悲歎大方な
へる一の小伽藍を建
の菩提と弔ふの外餘
志者中にも既に協議
地內に建設する筈な
施療患者　當地米界
在留米人の共同組織
至る迄素より施療を
者は決して其施療を
間の取調に據れば是
百名餘に上ると云ふ
同樣の施療を得たる
とあく威張り調子にて
聊か屈下せざるの氣
をあすは外國人に對
後其方法を案ぜ相成
も設置せんと有志の
石炭商況　此頃當地石
目下商況は頗增需用の
洲レドー一兇、同一ウ
堅し日本產の各種は小
行き入荷は重に約定口
入高は二萬二千七百八
一千四百噸の增加を見
と餘それは左の如し
米アンスラサイドは
にして漸々進歩の氣味
職入あく倉荷與の如き
り○濠洲レドーーはレ
にして二千七百十三噸
加した○が爲め相場も
價よりは幾分か安直に